
師走!宇宙刑事サンタクロース

名無しボーガー命知狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

師走！宇宙刑事サンタクロース

【Nコード】

N9571N

【作者名】

名無しボーガー命知狼

【あらすじ】

そにじゅうつ
十仁寺吾郎20代後半のフリーターは表の姿。彼こそ30代目サンタクロース。そのサンタクロースはプレゼントを届けるだけじゃなくて……！

俺は十仁寺吾郎（そにじごろう）。今年で四捨五入すれば三十路になつてしまふ俺は身体を鍛えることを日課としている。日ごろからスポーツジムに通つて汗を流し夜は建設現場で倍として生計を稼ぐ。また暇な時にもアパートの413号室で自主トレを欠かさない。そんな俺は当たり前だがバリバリのスポーツマンだ。ちょっとやそつとのトレーニングは日常茶飯事。最近は一日中ジムにいても特に問題はなくノルマをこなせるようになった。一日一日に連れて体力や筋肉が付くのは俺にとつても嬉しい……わけではない。

いや、筋肉が付いて外見がマッチョに見えるから言っている訳でもない。また筋肉のせいで服が切れなくなった事を言っている訳でもない。あとチャージ・インする際に必要でない筋肉を鍛えてしまつたせいでボー○バトルで優勝できなくなった訳でもないし、某シューティングゲームのボディビルダーコンビに間違えられる……ことはない。あの人達とは違い俺はスキンヘッドではなく、もう一人の相棒もいない。

では何故俺はうれしくないのか。ここで読者に答えを求めるとしよう。今からしばらく時間を与えるので、俺が体力や筋力が付いても嬉しくない理由を考えてほしい。正解した方には何かもらえるかといえば、残念ながら俺とそこのあなたとは次元が違うのでその件は諦めてほしい。でも考えてほしい。

（2時間経過）

答えが分からない？そりゃあ……そうだよな。いや、ひよつとしたら勘のいい人なら分かつてくれたとうっすらと考えたけど……

甘いなあ俺。じゃあ正解を言うぜ。ちょうど今日の日付は12月24日。クリスマスイブと皆は言っているが、俺にとっては聖夜も何もない。早く出動しないと世界がヤバいからな。だから俺は自宅の襖へ足を運ぶ。

「師走!!」

襖の中で俺は師走と叫べば全てが始まる。襖から登場した俺は銀のメタリックスーツに身を包み、その上から真紅の衣装に白ひげでコーティングされる。

白のトリミングの衣装に、紅いナイトキャップと白ひげときた人物をみんなは昔からサンタクロースというみたいだ。そのサンタクロースにそっくりなのが俺……そう、俺はサンタクロースなのだ。

だが、サンタクロースというのは皆が考えるようなメルヘンチックな存在じゃない。サンタクロースは700年前から宇宙の外敵から地球を守る為にバードクリン星から派遣された……そう、宇宙刑事のような存在。さっきの師走!は蒸なんちゃら、赤なんちゃら、焼なんちゃらとかのように僅か0.05秒のプロセスゆえにもう一度変身シーンを見てみよう!のような変身の掛け声。叫べばすぐに白銀のスーツを紅のコスチュームで包むサンタクロースという名の宇宙刑事へ変身する訳だ。

なぜこうなったって?それは俺、十仁寺吾郎は高3の時のクリスマスにサンタクロースを見てしまったことが物語始まりだった。俺に目撃されたサンタクロースさんは焦っていたに違いない。何故ならこんな掟があるからだ。

『バードクリン星所属特殊宇宙刑事条約第1条。宇宙刑事の機密が担当惑星の住民に漏洩した際は機密保持の為に該当刑事の処断を行う』

『同第2条。該当刑事の後任には機密を認知した者が行う。その際バードクリン星へ強制送還され、1年間の養成を行う』

こんな無茶苦茶なバードクリンの決まりで俺に見られてしまったサンタクロースは一瞬で塵になってしまい、その上俺はバードクリン星へ拉致されてしまった。そうUFOに人間が吸い込まれてしまうように俺は拉致されてしまった訳で……よりによって俺はサンタクロースという称号の宇宙刑事になるとは思ってもしなかった。そのうえ受験シーズンに1年間を費やすとは思わなかったぜ。受験の機会を逃した俺はフリーター生活を余儀なくされて……ちくしょう、こういう時期にサンタクロースを見てしまった事が俺の不幸の始まりなんだ。

「はあ……受験シーズン、受験シーズン……ああそうだ。受験生が俺を見ればいいんだ。そうすれば俺と同じ受験を逃した社会の負け組の辛さが……」

いや、なんてこと考えた俺。そうしたいのはやまやまだが、俺の姿を見られたら俺も善人と同じように処刑されてしまうんだ。死ぬのは御免だ死ぬのは怖いからね。

「レッドノーズ!!」

そして俺はレッドノーズを呼ぶ。レッドノーズとは簡単にいえばそりを引くトナカイのような存在だが、そこはバードクリン星からの相棒、サイ○リアンやモト○○リアン、ついでにブル○ークとかのようにハイテク、いやハイスペックなトナカイ。やった事はないけど魔空空間とか幻夢界とか不思議界とかでも自由に動き回れるというおっかねえトナカイだ。

そして俺は12月25日の夜9時にレッドノーズと共に宇宙刑事サンタクロースの任務を果たさなくてはならない訳だ。



「てやああああああつ!!」

俺はレッドノーズに鞭を打って櫓を急ぐ。サンタクロースは25

日の夜にクリスマスとしての任務をこなさないといけない。俺が袋から取り出したものは巨大なドライバー。右腕にそのドライバーを装着して勢いよく、なおかつ静かに家の屋根にそれを突き刺す必要がある。

「えーと、七篠さんちのは……これだな」

袋から取り出したプレゼントをドライバーの柄が変形した筒の中へ放り込めばその家の任務は完了する。サンタクロースがプレゼントを煙突から送るのは有名な話だけど、実際煙突のある家は今の世界じゃレッドデータ。だからサンタクロースが煙突を刺して底からプレゼントを送る必要があるってことだ。俺のドライバー「フュネル・ドライバー」はいわば”空間湾曲！”の要領で家に煙突を作って、プレゼントを送ればドライバーを引っこ抜けば煙突は完全に消滅する。ありえない兵器だが、これがバードクリンの技術といったところかな！

「えー次は……まじかよ、あぁいう団地の子供たちにプレゼント渡すのは俺凄いきらいなんだよ……」

櫛のモニターが俺に次のプレゼント配達先を知らせる。団地の子供にプレゼントを渡すのが嫌いなのは煙突ともいえるドライバーを刺す事が凄い面倒なうえ、一件にプレゼントを渡してもその団地から離れる事が出来ないからだ。だって、隣にプレゼントを渡してもその隣にプレゼントを渡そうと急いだら人に感づかれることもあるからね。

でもかといって慎重にプレゼントを配っていたら時間がないんだ。サンタクロースが一人で世界中の子供たちにプレゼントを送るには時差を利用しない手はない。何故なら地球は1時間につき15度自転するから。こんな仕事に就くまで俺は気にした事もないけれど1時間の間に経度15度の範囲のプレゼントを配り終わったら次の左の15度のエリアでは時間が殆ど変わらない。どうだ？これは普通の人にとっても結構役に……たつのかなあ。

「!!こんなところに出てきやがった……!!」

そんな時にクラゲのような奴らが出てきやがった。10匹ほどのクラゲのせいで俺がこんな苦勞をする理由だったりする。フーマクーダー。そいつらは一見非力そうで、人に取りついて、その人の体内で同志を生成してさらに人に取りつく……野放しにしたら厄介だという事だ。だが困ったことにそいつらは俺達宇宙刑事の外線ゴグルを経ないと肉眼で見つけられない厄介者。そいつらを捕獲してフーマクーダーの侵略を防ぐ事が宇宙刑事サンタクロースの本来の使命なのだ。おっかないねえうん、我ながらおっかないことしてるなあと思うなあ。

「こいつでとっ捕まえてやる!レーザーネット!!」

ドライバーを変形すれば光の網が先端に展開する。柄を持ってフーマクーダーへ網を向けるのだ。俺がフーマクーダーを捕らえる際の必殺技はサンタクロースダイナミックとかサンタクロースクラッシュとかサンタクロースブルーフラッシュとかついでもってアークインパルスとかでもない。残念ながら虫取り網で昆虫を取るような必殺技に名前をつける気にはこっちがならない。

その必殺技名に関しては誰かに任せるとして、そのエリアのフーマクーダーを全部ゲットしたら網を結んで袋の中に入れる。これでそのエリアの仕事は終わったことになり、次のエリアへ急がないといけない。一つのエリアにプレゼントを渡す必要のある世帯は約450万世帯。1時間でノルマをクリアするには1秒に1250世帯へプレゼントを届けないといけない。その際の速度は秒速でなんと1300km以上。マッハ4000以上の無茶苦茶な速さでレッドノーズは走り、その時間の間にプレゼントを渡すのだ。

正直こんな無茶苦茶な速度は身体に毒。生身の人間だったら衝撃でつぶれてしまう程の破壊力だそうだ。そんな俺がこう話している余裕があるのは、このメタリックスーツの力……といたいけどそのままスーツを着ても危ういので日々己を鍛えないと……レッドノ

ズが走り出した途端に俺は棺に入れられてしまうだろう。好きで鍛えている訳じゃない。けどこの12月25日の為に鍛えないと俺が死ぬ上に世界が危ないからには鍛えないといけないのだ……悲しいけどこれヒーローの使命……だよな？

しかし、気になる事もあるとおもう。フーマクーダーが何故クリスマスにしか現れないかである。それに関して答えは簡単……フーマクーダーの生息する惑星ワラーから地球までの距離が1光年もあるから、ワラーから侵略の選抜部隊を送り込んでも光の速さで地球へ向かって翌年になってしまうのだ。なので1年に1回の敵襲になってしまうという訳。でも俺だったら、時期をずらすとかしてサンタクロースに迎撃されないようにプラン立てるけどなあ。これが約700年、つまり700回の侵略行為と考えると、どれだけ相手は馬鹿だろうかと考えたい……。だが700年もの間サンタクロースが彼らフーマクーダーの脅威から地球を守っていたのは事実であって俺もひょんなことからサンタクロースの1人に名を連ねているんだよなあ……。

「うああああああっ!!」

やばい、これ以上俺が語る余裕はないっばいな。マッハ4000で突っ走る俺がこう語るだけでも外の衝撃もあって色々苦しい。俺はサンタクロースとして使命を果たさないといけないから。この後の話は家に帰ってから話そうと思う。



そんなこんなで俺が帰ってきたのは12月25日午後21時24分。僅かにタイムロスがあったものの、フーマクーダーの回収とプレゼントの配布は完璧に終わらせたと思っている。だが困ったことに俺はそれで助かったという訳ではないのだ。

「第30代目サンタクロース・十仁寺吾郎……」

「個体維持に関して極めて危険な状態」

「う、う……」

俺の目の前の黒服二人はバードクリン星の銀河警察連邦の使い。

そんな俺を迎えに来た理由は俺に危険が迫っているからだ。

自分で言うのもなんだが今年はすっかりトレーニングを欠かさなかったのに結果としてこいつらのお世話になってしまった自分が少し悔しい。俺はサンタクロースの姿を保っているが、それはスーツの力のおかげであって、スーツの力がなくなると、俺は液体になってしまう。時速マッハ4000もの前に俺の身体が形状を保てなかったようだ。

これから俺はこの二人によってバードクリンの科学で治療を受けることになるけど、完治してまた地球へ送還されたら俺は12月25日までに自分の身体を鍛える必要があるわけで……どうやらフーマクーダーが根絶やしになるまで俺は宇宙刑事サンタクロースとしてgて使命を果たさないといけないようだ。

ふと他の人にサンタクロースを譲りたいと思うけど、そんな事やったら俺は処刑されてしまう訳でどうやら生きている限り俺はサンタクロースのようである。

そうだ、最後に一言。サンタクロースはどこの人とか？ 素朴な疑問を抱く子供がいるかもしれないけど、親御さんは子供を夜早く寝付かせるようにした方がいい。もし子供が夜遅くまで起きていてサンタクロースを目撃した日には俺も責任を取れないからね。サンタクロースついでに宇宙刑事もやらないといけないからね。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9571n/>

師走!宇宙刑事サンタクロース

2010年10月11日03時45分発行